



凡和歌乃讀方と教つば、うの
體脳式等曲に流布する所も多
くつゝも稚兒の初学を遍々窺ひ
むるをあくびりく握筋せよ。古
賢比庭訓は實千鳥詠ある物。
沖澤玉藻のまゝまゝ仰り何諸
抄と猿華——師統等の事にて全
部七冊初掌和琴式と号本より

童蒙ノ助也もしつゝ為むきひと
ありりにては、よほんかのけと
とえじこや

うるうらむよみのとや

哲學和音式目録

○一卷

一歌と可ひに事

○五卷

一歌ふふと源、可入事

一か音とりすのす

一字歌とり事

一通音ひるす

一然歌とり事

一氣歌奇角音の音

一歌と可ひら可漢事

一和音魏ひのす

一歌と初立文字ふます一沈事

一和音字ゆのす

一歌とまひととりふ事

一和音奇角音のす

一歌とよひせて後事

一和音魏ひのす

一歌と後半せて後事

一和音乃初ひのす

一歌とい音みゆづりて後事

○自立卷至七卷

一歌のゆづりとり事

三代集詞寄

一歌
歌の事

雅歌八章

一 段文の歌の事

一
卷之三

一卷
卷之三

一もしくは漢歌の

一竇字のひ

卷之三

一歌は未熟不お應、并に季と並んで歌謡古の事。

一名の哥陵やうのよ

楊學和奇式

顯之譏方

歌と書かねば事
歌とあらわすは先歌の文字片字より実字あり
虚字たり文字虚字のすれ交歌ハシムとこそよふた一ノ入候
歌めりまへりて以てき歌めり候。或其歌はねえむる
めりふね無乃すめり候。各ふとく。自物のうき
よも及す。ばれたの功をよびぐ。これぞ事のとく。
歌ふとゆ可入事
歌よこくつとくくしよとハシムハ
一ノ如歌板板を打云程よき事。すれくうきふとくい事よき
アリく家アリク。かくよき事。かくよき事。父をよき事。かくよき事。家
経とまれてゐぬ事。かくよき事。其ゆき事。かくよき事。

卷

卷之三

後漢

卷

千九

通叙

卷之六

二

卷之三

○七卷

一
和音詞諸妙註釋卷之三

卷之三

四

卷之三

とく事次と申す事よりは少くともとよハめどがまく其處
アラカツトモアラシヒテ後の大難也ルトモトマニ取
トモナシギモトモ常とレヒトヲハナリトキハ詮あけ
ルハナリトそれと育明の尼様寒ケトツハ育明様也
よつとして又聲も聲無れどとんと嘯方々とひひとも一
テヨモ寒ヌルテヒトスルヒトシテ別の事也 リリ

國學

後古今集

卷之三

卷之三

卷之三

三

卷之三
七言律詩
七言律詩

卷之三

卷之三

秀家

四
九

1

卷之三

三

二

卷之三

欽定四庫全書

秋夕電

白山集

秀家

卷之三
金言
野山
學義
藝深於

一字歌といふ事 一字歌といふと、宝霞、繁露、梅竹、属月光、雪
の事である。此の事は、高橋、吉門、庭訓が作おおきる。云々^{アリ}。
アリとも云ふ。下のよ歌ハモリトハ、とハ元の歌ト、ソレハ多
くある。歌を下すと、歌を上すと、歌を下すと、歌を上すと、歌をい
ひ下すと、歌を下すと、歌を上すと、歌を下すと、歌を上すと、歌をい

ひすこ字歌ひよりよすきれぞひからくも
ひそどび歌とつ六歌の文字三字四字五字など
あうせうふと、初雲霞雪にす百たまをうけんれ歌
されゆもよあさじとしとしとす日よ雪としとしとしと
ぬ歌乃文字のすよハ麗字寔字ウツ、そちりうまれと
よくくわめて後アヒて走アヒとひけアヒ、すのと立アヒの元歌
の爲アヒやうひうきとひばとぞとアヒ、アヒ基歌アヒの事アヒ
と見て後アヒか死アヒと可アヒは情アヒめろハ歌アヒ人アヒをつらアヒまじ
或アヒひき又アヒが終アヒたまうりて後アヒーと並アヒ来アヒれ音アヒす
えりり歌人アヒよ不廣歌アヒひきの功アヒよあアヒー
歌アヒを云アヒらす歌アヒ、是アヒかの二字三字四字五字六字七字八字アヒ

一束極善門庭訓れ云二字三字たり後ハ四字を用ひ
又トシテ其部を一筋に至るに至りて是より又其へと
名と云々曰くも金とハトモ下向むかひてよし」と云ふ

金と金と金と金と
金と金と金と金と
金と金と金と金と
金と金と金と金と

一阿弘也作是耶乃文字之上有此皆殊之謂也
乃其子也

おとこが死んでゐる。おとこは死んでゐる。おとこは死んでゐる。
おとこが死んでゐる。おとこは死んでゐる。おとこは死んでゐる。
おとこが死んでゐる。おとこは死んでゐる。おとこは死んでゐる。

山家打瓦
張擇端

既至望支宇は尋ねて記事
うりを尋ねてはまくは嘗ての事と
うへ物事一の實乃下と火打せられしれども
まくは嘗ての事と

一京極中納言相語方書云是ハ勢也々々り、此のち
ハナリより其事とも少しきりの事と多く傳へる所ある
をもて則ハ後京極公は今者去るに附てとひゆと
ねまこと後うる人わざと後事にてめありと云ひ故め、
是あきえりすんぞく附毛とものりすより云ひ
物のうづくみがれ入るづくよえ耳とものりとおひき
と歌そよと、歌の文字と物なりよもづくとすも
トうやハ其歌よもはなまことどひ又、歌の字を絶
のちづくよつて上句よゆくもたまうのと多
種類ともいふも歌の字ハ二三より甚くセアリ、
とくえぢかひて廿二首には歌へきと云ひど無、さうの
とからうごく否も皆事もくせんく然へて又、
歌は歌の事とぬようはよくあらむとてりよび
よせひ角とハ元よの音、之候是ふい聲のれと云ひ
うひとて歌は歌の事と云ひたす

と五文字あつたとてわざわざうへ
一八雲口作案歌の句は絶つてゐる
の後からひきかねど西門院石の歌たゞへます
てあれハモリ全さん歌板がくらべて皆今翁
としもくらべてしきりに但されかへそかと詠へ歌、歌
音に従ふん寧トキを度バ一とえまことて並
玉れど歌板とさればしてしきりにゆきひへうぐる
一とえまことて並みにゆきひへうぐる
アトよ其歌ひへうぐるやうよせちう御そつづきうぐる
也御史守すゑへうぐるやうよせちう御そつづきうぐる

新古今
卷之二

新古今

鐵道院志稿

入室大藏家

卷之三

大寧大武宣家

元々の名前を書く時から本一冊をもつてゐる
が、もしかれども、どうやら、さういふ

سی و سه

やうもんとて此をもつては然るべ幸めの事とされ
り事のなかで唐歌より多くめりこれと文字教多
くがとくにひづれあればまことにかづくわよ
くもぬけたるかづき文字をもじて文字をか列して
よ

文獻卷之三

道を渡
雪舟
まよひのまへ

霧滿遠樹
曉古今
生永心

林奇通社
新古今
有歌

卷之三

後古今

太上天官

めうれせぬよまくかめうれすがくそれまゝ壽の心有
辱一人也

人ひのまへてはうへたのをのひかへてみほ
やのうかはてかよほせ

早朝。内
事也。

五月雨久
伏見陵城そ
監製

クムヒハ五月の日暮をかうひとすまゐるがゆ。ともに
五月のひよそかにとくよえあら

莫氏春秋
全宋
清源流

卷之六

五言通鑑
卷之三

二月
通達
家集
後略

一
遠近秋風
王穀
清早的
暮色

。 。

吹きぢり外すひへ
松丸玉乃松もあうちまどかう

外とよしと人を八字よりせりの松下近きんむす
等庭露風 新古今 墓後

麻聲兩方
千秋
芝延法師

まことにかあうゑといひ能ハ鹿の社と云ふてきくされ
鹿の社をまつちて宇摩とひよみ方そぞらむうち

卷之三
史記
漢書
後漢書
晉書
宋書
南齊書
梁書
陳書
北齊書
北周書
隋書
唐書
五代史
宋史
遼史
金史
元史
明史
清史

梅志

庚午秋

墨東氏

トヤマカツモハ屋とハ天川がれみ並聞スヘシトモ、を、
セタの辛ニ一花のをとよみて拂ひとひきうる
逐日病憲

壬秋

庚

立候ニテより御ヨウされはるのあればハレムシテ、
シテ家送年 新古今 麻葉法作
ミリテキテ本邦ノ一花と申かうシテ、トナリムキト
全キリ、初ハ立ツツツツツツツツツツツツツツツツツツ
木モリテ、はる乃どとなれども、年カドヒキを
くちり

遠鐘鳴

新古今

入江承教王

初寒山ノヒノ候のをとれハシテ、シテ、

竹有佳色

新古今

吉野院
鶴たた庵

立候ヤシテ、竹乃ねとまつて、あらのをそそぐら
吾やとヒシ色

トヤマ千世のをとひす佳のすありとそそぐらり有乃
字此ムカリ、ヒトクヒ不可、傍斗各准一て可也
歌とおせて、筆事、おらせて、後とハ歌とよりて、後とひす
トヨシ歌のめと同よりて、後とひす
吾やとヒシ色

一候月が玄そのわ乃もくよまれるゝはすあれかとて
後、一うちもれとりよハシムとて、うやく云ふ、
ヨリとミアされといふもおどろくといふ内一
八雲の御云歌とくくわぬくへまし、天象地儀植物
動物とて甚神ぢんぬとハアシと、と粉ドコロ、
の中ス歌乃字と薦すとハアシと、と粉ドコロ、
おひせて、後、ちむちむ、證哥、等を天象地儀植物動
物とて甚神ぢんぬとハアシと、やう雲、粉、雪、
火をば川、矣が空、等子鏡などとの歌乃字めうたしゆ
く、歌乃くらひハ初よからべて後、とぞれ文一

新入也之元落とす。トモアリ證否

落以水

郭子今

卷之三

レニトシモナシテハシクアリテシテル
ロ今眼鼻ニ通候事乃はいふとシテシテモカ
ナリテアヒハシクアリテシテル
チユウヒヨウモシテシテル

卷之三

۷۳

卷之三

とむ人もありうちなまくらゆきし處る御のりうじねて
萬葉の内なりかくよすをへとひよ水とおひそめ
侍時鳥 立身四日寄合

今も爲めにまわすと云ふせう
愚向後感をもつ

心向後成多有

のあとにせん
ほくをもね

是に鑒定の方法、その文字と筆の筆法も
考究せよ。筆法は筆の運び方、文字は筆の形態を指す。

浦乃翁と申せらるゝなどはさへ歌の文字りもあれ
まちへ行ふておどされたるやうな人のこと見つけて
よしや傍例よりふくよトヨラム一巻歌とわ
ら見て、縁す詩乃破缺のところ傍例

花雨山家集
讀書會

讀書

卷之三

私にうなぎ取乃手こ一役云瓦绿玉左壁丹青色新丸錦
繡紋これにレ乃詩也いふと故绿せんとえみハ奇
一二勺よひの分あう下三勺よハ義乃もうち、狂歌之
うとせ

卷之三

七

おひれも御ちうねを初めちうみてそのねとおせうる是
はまれどとのおひまうて初ふへゆくへよすとおひま
歌とおほえゆづて後す いはゆづとハ歌乃文多くおまけ

もがりへくいひあへまことひくみづとのもう
と惑えかうなきしきだすとくとそのほえゆづてども
といふ

一近来凡そむとび歌とばよばしてとむアヌハヤうな
説をとくとてうじーとくとく證母

條朝お冬物語 千秋

佐成

やへきやあらぬとくとくとくとくとくとくとくとく
條朝物語とハシハシめあつと物あつてとくとくとくとく
その歌のとんてスハシふ歌筆をとくとくとくとくとくとく
ともふ寔字えとふ難歌をとくとくとくとくとくとくとく
ゆづてとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ふ女のいとまう車のきらきらをとくとくとくとくとくとく

ちよべーと幼年ーされば男女のいとまうて坐れ
歌すてくとてくとてくとてくとてくとてくとてくとてく
とよかうて男の歌ハラソんとれしつくとくとくとく
てくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

等思古人恋 家集

本草法師

いのくふのいとまうの歌のいとまうの歌の歌の歌の歌
等思古人恋 家集 本草法師

等思古人恋 家集 本草法師

とひきり女せんぐくかくで寝てゐる。門玉がとまらぬうり
さればゆきうりの男も内へくまとしゆうかくよし大和地図
玉をくわづかへぬむ急ぎれはれはれ用ひれり
駄々くらきすみゆづくで寝る。それもかねやぬふゆづくで寝る

心地より是又とむ乃も之をへ證哥

行

卷之三

定家

也とつうひどむかくもくもくとやらぬ事多き。うなづく
ソラヅキハれは季乃す艶のみの歌乃とし悪の歌
アモリシビト萬ハ思ひ多うてハヨアシムシテアヒトシ
ハ代をうきアツカシむ者ハ季乃歌ヲモ各歌ハ
シズ一義ナク、歌トカリムトモカタシハ又ナレ
モハシカニ次ノ歌乃はヨモミシハタタキモ歌ト
トヨリトテ萬葉と萬葉シテヨリトヒナガハ滋元
ハルトシモ歌トヨリアツカシ歌ヘモ歌モ又やう
ユトシトカニハバ
一
ノ向野宿云々歌ユ内トナセルみえとテモテナヒケン

アヤシミノ如ヒリカニ威儀詮等ト丹波舟
前もつゝあれりテ奪フ知リサシヤハヨリのうとも見え
トイヒ無術ノアリトナミ材ニエトトモヒトモ居ル
アレドモ極秀才ナリハ各おこへ歌乃老矣歌うヒモトキ
モハ奇合

乃列後も序段あきらめどひのよやまくらんと
る駄のようが名ばかりの處でとくべくやとお見是
處の駄と似え名なり處

ふもとのふるさとへうどん又

卷之三

六百四書會

かをもとめりきりすらあくまで秋あめうんきそゆう
判官殿たお新相とゞせうへて秋あめうんきそゆ
うへとひきもひくやまもむれ樹乃まくわうひ
とまくわうひへ秋あめうんきそゆうひ
ふまくわうひとまくわうひとまくわうひ
秋夕ハ物がくくまくわうひとまくわうひ
くまくわうひとまくわうひとまくわうひ
よりて勢うらうべー一板ユえせばくまくわうひ
とまくわうひとまくわうひとまくわうひ
を白かくしゆの約などとまくわうひとまくわうひ
通じまくわうひとまくわうひとまくわうひ

其れへ又ハ歌トヒウラシモキテエタシハ之のノ観
ヒヒ歌ゆゑとニ婦ナシ又ハ歌ナシバ歌シトヨ
タクハリテモリ会シ可也シ教シ歌トシ歌ト物ナリ
ユアシムトキアシムトキアシムトキアシムトキアシ

一和壽用意之云又歌乃やうすむちひて歌乃丈吉と八工
ハセツノサト

下之謂也。故曰：「子雲之賦，漢賦之祖。」

雅歌の序

詠歌とハ詠歌のとよひつゝと歌、
恋慕思み人恋たるもの歌へ又家系に岩門百首の歌を
一和琴庭訓がえりとも未経乃能八日比歌、六月ひまう
詠えて絶べきトノリの事、らしづゝハニシ歌の事も
くちづきとてはいふかもころうへとてゆゑ竹りくせ歌を
どからとくらむれてほ今とがをひひ又法界、六月ト
詠歌かどとてうちもとハふ可りトとく是初夢乃

行ハ破歌ナシハ後ニテビテウツツノコトハ又破歌を

ムシカシテハシクアリシトナリ

経文の歌の本

一巻同賢達云法苑經のあれと乃き傳説ハ只もどき
多又初うそ傳説も作例うそも卷もどきうて云々と
よそんも初うそううそでテテ傳説もくわふくうそと云
例 まううそふとくうそと云々と云傳説とハ經文ハふくう
きくさす事物ももくうそと云て傳説と初うそとてテ
うひとハ經文の初うそうて物事もくうそとてし

法苑經序本 莢度諸衆生其數無有量

エニモキテ教もくうそと云いきもくうそと云
それハシムフニトモテハシムヤ

同隨喜功德本

最後第五十聞一偈隨喜

谷門乃がうそのまと汲人もまくハシムシテウソナリ
これが慈慶うそ草の萬叶の字とす乃字ヌトセ
アレトシ河又うそと云うも

円安末行本

深入禪定見十方仰

寺前うそり居とまちて入られハシムシテウソと云うも

同譬喻本 其中衆生悉是我子

ミハシトシトガモ歌ノ人世中もうるはせ乃ありタリハ
それハシムシテ物事もくうそと云うと云うと云う
是等もくうそと云う也

傳歌の事

これオ一乃雅とぞもくうそと云うと云う也

一巻同賢達云傳歌トシトカクハ歌の如みと稱と詠
くことくをやむと云ふと云ふ又云歌あつや云ハシムシテ
云もあつ歌乃シト後もとも傳歌トシトハ凡三十至五
十至六十のれハこのミヤハシムシテ歌乃云云歳の
歌乃あんまと歌は歌をも秋の歌の如云又參とよ
さんとこれと云うてハ云其歌をも又三モユモヒト
もシテ傳歌トシト云うけ云傳歌トシトカリ也一云
中玉傳歌トシト云うけ云傳歌トシトカリ也一云

よきうりとそれも折二三分折七八分折よりハ折
しらひ物にて傳承するを申すが四分折六分折又四
分傳承と證す次第も又一折半折と申すもあ
は折乃折也と又奥乃折は折と申すとてうりとす
されどくのハ三足立と申すと乃かよやうよめうひつと
三十足立と申すなりられべこれもくのハ三足立と
トよまの歌よ成秋の歌よ春歌など乃くのハ別
てうきやうれどよまうしてハ三足立と三十足立
もつちうればうきてくのハ三足立とされ恩賜
往乃致し

一月始セタセ首よ天川とよみてと歌よ天川とよみと
くのうろくうろくとよみとよみとよみとよみとよみと
歌よハ傳承とよみとよみとよみとよみとよみとよ
みとよみとよみとよみとよみとよみとよみとよみと
りを定家セタセとよセキナガテ天川とよみとよ

五後文とあうよきの例ナシベニシテ二その中
の傳承作例

一定歌お詠え長徳百々の中侍春月

吉義の名前乃形うらかうりハ傳承のむりのあくう秀
忠ハ伝承の柄と仰ぐるもよそト近代ハ相傳へなぞくよ
傳承と天川のあくうやうとよみとよみとよみとよ
くべーとていもさり伝うるべく用るよそて民ア石
室変た木門尉方内あれと仰られんざるよそとよそ外
記六支馬元めくと物のくびのうてこととやうりを
さんハくねどくとよそとよそとよそとよそとよそ
人うとヤセ又えか記くびよのうとてくとくのひが折と
傳承とよそとよそとよそとよそとよそとよそとよそ
歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌
よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌

よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌よ歌

每朝と筆を拂ひ方の度の林にあへるやの神ありしる
列祖歴をあふ。くへりてど神の御名うらの鹿の神はう
てそすへばれべ廣乃駄うそ。さみくとこころうめとま
これもあくまへ鹿のうそとされば傍駄よりもくつとも此
一えぬ峯寺改宗會も会 寄越也

うらうへ夜くさしろよ人の心とまきあられ
判官惡傳引ひ衣うそとす用ナリとま
一八雲に付乞歌よどご五物と後入と冷か一連と乃傍駄
のうそとされへとまくつてよらふ驛夫とま
もわくお妻の歌よ幼の歌とよとすとくべがの歌よ長
ひまわを引くとまくとまくとまくとまくとまくと
てとわくよとくび一伏物とほきくすけたのうと
きうと歌の物いとうてほきくすけたのうと
よ傍駄よかわきとまくとまくと歌をとくすかよかわきと

片凱の章

序歌夜ともものやよひのいとけり
一 番細川吉昌所蔵下
一 番佐方宗佐作 云序歌といふと、物を
いとほひとすよーとやうて一とくもやうのよー云
物二とほひとばとバ若間写といふ歌えれまわ
て寫とぞあくびいへる毎ともよ實歌也と云
歌の事わとほひへ又眼目とほひ文字とほ
ひとくもせひと又ちよめう歌よめうてよくとせは云
そえて序歌詠括舊歌よすうひのくらく可か題
一 番行抄六絃院 云序歌けいわん とくよはまつひの歌よ
勅作 とくよはまつひの歌よ
歌へよのものよひとひづればかりふ家と歌との歌
かとほひそのよれとひともあれから歌と書ひ
とひせひとすよはむかひの、唐歌ハ空ありぬ
くるよくおひとくよくおひとくよく

わくはれぬ歌乃事

一耳廢記 雜丸之序

背りろく後れぬ歌ありそれをつくし書は勞して功が
さうこそそれ何でこそどうしくなくしてどうかよき
なり速奇才とふもつるぬあらびと山吹共に
などへありろく後れぬ歌せども

音字ひき

歌の文字のちある中よりひきありよま
でどうう文字あり必よどき文字と実字とりて
一公書口傳之歌の字をされども必一も字をよみ歌今ト云
もありば歌又ハ何の字を吟てあぐとこかて
可後入て字毎よみナシもありと云お字をよみ入
さすともありとべとベ季陽已聞といふ歌ハひつ
くすゆれど善意の心うてお川へ二早適逢と云歌
ハセタの年よ一歌あふをそね叶商律欲盡とあつる者
歌乃ふとよめへお邊に又字毎よみナシことハ池の
牛水邊不達意依恋情恋絆期空切意等思を愈
げれふ可縫手

音字之歌大略

音字のひきどうふ

○出

○並出谷○紅葉出垣之歌也

鶯出谷

虎集

歌也

えなみ山谷乃うとの鶯は歌くやうせの喜とゑうむ
お葉出谷

淡雅吟

歌也

○入

○愛寫入處○山亦入簾之歌也

愛寫入處

瓦集

歌也

林くみと柳くとらて音くかくとからたくれるくゑ
山亦入簾

虎集

歌也

ことのれわくはまくを簾の強よにちゆやよ乃ぞれ月
未○并東昇○雪來深之歌也

鶯未開

月

歌也

青雲とく風ゆひそむせよし定かうやむり乃きうは
雪來深

歌也

歌也

々みとく雪ゆひそむてくま山れう薄やまらかくゑ

○傷 ○秋夕傷心 見月傷先矣

秋夕傷心

千尋

作集

見月傷先 た
老うと乃ちもすへ山の空うつくれとあればせよ

○厭 ○被廢患之

被廢患

千尋

作集

○到 ○野在到暮 之

野在

千尋

作集

○何 ○野在到暮 之

○何 ○野在何在 岐鐘何寺 之

野在何在

千尋

作集

○伏鐘何寺

千尋

作集

白鳥とよさひ おやめおれどうのをよもうは

○急 ○急早苗 ○急別急 之

急早苗

白川久セ西風

行友

のくわくまゆのねくれて

急別急

千尋

は柳葉院

○遙 ○遙一郎 之

遙一郎

千尋

長伴

かうて乃体もつたつやくともハツフクシカモリ

遙一郎云 漢後拾遺

千尋

後モ取段

○恥 ○恥恥老 之

恥恥老

千尋

おもておもておもておもておもておもておもておもて

○辟 ○辟辟屢矣 之

辟辟屢矣

日

嘗未成功

○尾。○水香品社。水笛水聲之類。

水香品社。

新古今

直承

水笛水聲。

新古今

直承

水笛水聲。

新古今

直承

○解。○水解之類。

冰解。

新古今

直承

○共。○共偽惡之類。

共偽惡。

豆子

直承

○近。○近誤。近急之類。

近誤。

向門反七更

直承

○散。○雪散凡之類。

雪散凡。

新古今

直承

○契。○契惡之類。

契惡。

新古今

直承

○敵。○雪散凡之類。

雪散凡。

新古今

直承

○誓。○誓惡之類。

誓惡。

新古今

直承

○兩。○鹿声兩方。兩方惡之類。

鹿声兩方。

新古今

直承

○遲。○暮月遲之類。

暮月遲。

新古今

直承

春日遲

叢集

遙空度

○送

花下送日

曰

生离

○送自之數

○送

花下送日之數

曰

永休法師

○忘

差忘光。忘惠之數

差忘光

叢集

久留

志惠

妙法院

高氏

○別

別惠之數

新勸機

延平古清

○終

○死終也。終不無之數

終不無

定家

○死終也。終不無之數

終不無

俊成

各あるもあらむとれせく水のがくよなうみてくとれ

○矣

○折無事之數

れ

故為

春日萬

叢集

後御度

○萬

○春日萬。萬居之數

道を度

○益

○行者益宅之數

七

外景卷

千秋

古文叢書

○ 伊
かひのくねとのまきうつす門うわせや玉爐へとハ
○ 悠
。悠々之れ

源惠

集

佐助音度

○ 降
。音降^ノ谷之歌

鶯序谷

新撰古今

佐室

○ 変
。変々之歌

愛惠

新拾

佐秀

○ 薫
。薰薰也之れ

蕙獻號

千秋

佐室

○ 雅
。そ歌雅唱之歌

冬歌雅唱

月

佐秀

○ 依
。依依倚矣。依也源惠矣

依依倚矣

金采

佐大

○ 乃
。乃乃如也。乃方之通俗也。乃乃如也。乃乃如也。

乃乃如也

新拾

佐桂

○ 乃
。乃乃。乃乃之歌

新拾

佐永

○ 雅
。五字詠歌之歌

西壁雅家

集

○ 乃
。乃乃如也。乃方之通俗也。乃乃如也。乃乃如也。

佐物音度

○對。符木侍力之れ。

對水侍月 金空

基佐

文乃私の日侍経のてとひひまつりをめめびひつ

○通。遍逢延之れ。

、遍逢延

報

小竹匠

それとふたへと同じよろかまきもひつかれこくを
。言。柳まえ

柳まえ

吹集

活版

○至。多事も之れ。

多事も

吹集

通鑑

○遠。遠御恩之歌。

遠御恩

傳琴

云實

遠御恩の歌はひづきの歌で云々

○深。お深むる之報。

お深むる

吹集

活版

○貴。お深むる。左思あ合。
自家のゆゑを豈かにあれどれをあわすくすむ
。添。お深むる

お深むる

吹集

活版

○連。連奉貳。左思あ合。

連奉貳

吹集

活版

「この歌の事のとまややあくべとくの歌のこのまのま
。連一連重。急かせ重。」

。連奉貳。左思あ合之報。

連奉貳

吹集

活版

○積。積雪之報。

積雪之報

吹集

活版

後言

總論

卷四

○摘
○鶴董之教

ナミ

西年

○鶴董

西年

○章
○章史氣

西年

○章史氣
ナミ

西年

○空
○空史氣

西年

○死
死史氣

西年

○死
死林

西年

○長
○秋長史氣

西年

○秋長

西年

○秋長
秋長史氣

西年

○鷦
○鷦之氣

西年

○鷦
○鷦之氣

西年

○死
○死史氣

西年

卷之三

○室。
○傳郭之室。傳郭之室。傳郭之室。

侍郭之室。日。

西行。

○群。
○傳郭之群。傳郭之群。

傳郭之群。

新營之群。

新營之群。

○姑。
○傳郭之姑。傳郭之姑。

傳郭之姑。

日。

新營之姑。

○娘。
○傳郭之娘。傳郭之娘。

傳郭之娘。

新營之娘。

新營之娘。

○内。
○傳郭之内。傳郭之内。

傳郭之内。

新營之内。

新營之内。

○海。
○傳郭之海。傳郭之海。

傳郭之海。

新營之海。

新營之海。

○写。
○傳郭之写。傳郭之写。

傳郭之写。

新營之写。

新營之写。

○移。
○傳郭之移。傳郭之移。

傳郭之移。

新營之移。

新營之移。

○挂。
○傳郭之挂。傳郭之挂。

傳郭之挂。

新營之挂。

新營之挂。

○裁。
○傳郭之裁。傳郭之裁。

傳郭之裁。

新營之裁。

新營之裁。

すらうる方をこそは休むたゞくやとのまれととせ
○疎 ○休む之類

疎矣

放集

放河

かどまりにゆうゆうなまくて順じの往來
○失 ○失迷の意之類

失迷の意

日

出放

ぬくべからずよりあれど又猶くれ
○疑 ○疑惑之類

疑惑

新復稿

内通

もてより人の心を考へあわせとてむづくまえ
○病 ○病氣之類

病氣

新松達

新康法伴

そひろふどきうじくのうちのまひとくより
○勤 ○勤勤夙夜之類

勤勤夙夜

放集

信取

そよが室中花の緋萩とまくらの丸うつまく

○後 ○後月之類

後月

老夫子

寛内

かとねうんぬうじく無乃ぞれめと入とおぎり人

○眇 ○み毛之類

眇毛

後陰達

五言白居易一系

未されとれさゆうとほよこちうてぬうとそのちゆさ

○隙 ○隙地水之類

隙隙地水

れ

通ふ

青術のうれううとゆうとゆうの丘岸とゆうとれ

○岸 ○海岸内之類

海岸

出延齡之類

坐定延齡

放

堅季

経緯の事のえもんを極り、うなぎをめぐせの事、事々れ

○思

○思慮之類

三度

ひとりと我うてぞりんばのゆううさくのがりすかえ

○廢

○重雀居之類

雲雀居

は集

まよひきこみへゆきたり、虚くうねわそれとあまう

○警

○戒戒居之類

荻聲家

経緯の事

沙梨

まよひきこみへゆきたり、虚くうねわそれとあまう

○多

○平萬多之類

早苗多

経緯繪

五度

くすり又がむわちてよひそ多とよぬる早苗多がてすか

○情

○情意之類

鳴鶴

経緯繪

五度

さくじゆくへ後乃まよひ安ヒリルヒトハムヤモウ

○重

○重花多吉之類

草花花盛堂

経緯繪

五度

○折

○折花之類

折花

新渡撰

五度

ねむねむひやまと極花多吉てうせひうつまし

○悔

○悔意之類

悔兵

玉壁

経緯繪

五度

○悔

○悔意之類

花倒盛

日

新度繪

経緯繪

新千載

花易教

新千載

経緯繪

新千載

経緯繪

卷之三

おうとう又そぞれて重ねたかくもまたやうじきうれ

○破 ○ゆば

破壊

破壊反

凡破壊事

喪集

うつ憂へやまかくに延びて、月が昇はるやうゆふるに無

○傳 ○傳表傳意之類

傳表

發子秋

秀表

秀表

秀表

さみやうむひよりをすりこゆうくりこすり

侍憲

新古今

式子門親王

志体と稱やへもづみ林八とみづこれよどみのひみた
○毎 ○毎葉船川之類

毎葉船川

丸

御體

御體

うしの舟月船とくうの舟月船とくうの舟月船とくうの舟月

話憲

空集

迷夜宿

あきらかにあきらかに空のまゝに迷う夜宿まゝとて

稀○寫稀○稀遠之類

鶯稀

日

日

うとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす

稀憲

發子秋

源兼氏

トヤヌキも落葉が天川を引ひめの難すこくもてせえ

○文 ○文元之類

文

千

為井

今いぐれ表乃とくすうりてもものきぬはあらとすあは

○徐 ○表乃表之類

表乃

丸

御體

奥

田家秋興

新藝撰

家通

強ひかの「田」の格のうちもとておきてからとてしはれ
○深 ○深表表之類

○深

深表表

深表表

九九二

かまくら本

保承喜月 緒言今
とれ方侍ふうとなくもてあらすじをえみゆう
除ふ抜 令坐 改正育

巣つてきわへる事あらずてあらゆの邊をとひむすれ
。お延年之教

。改

松延年

緒古今

衣笠山本

位をひきよせんとせひそひをもてて久松のをふ

。古

古術

叢書

道をほ

。舊 。舊惡之教

舊惡

日

後河

。如 。如元如善之教

外花繁

新古今

保承喜

。故 。せ土越至之教

亞土越宣

新後機

高象

。龍 。露翁を樹之教

露翁教遠樹

千字

佛象

。涙

露葉涙雨

日

月

。涙

。桃元涙客之教

後機本

。擇

擇ふ榮

丸

づれども人をもてふりてあともうづれ

○照

○月照草方之部

月照草方 十秋

友承歌盛

波牙原藻等みひどよきこととぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ

○唱

○唱月之部

明月

伍集

後柳家段

○逢

○逢月之部

逢月

新後拾遺

津下長森

○浅

○五采城之部

五采城

四集

後柳家段

○遍

○子祝遍之部

子祝遍

新後拾遺

後柳家段

○毛

○毛月之部

毛月

日

毛季

○顯

○顯惠之部

顯惠

新後拾遺

林名院

○毛

○毛月之部

毛月

日

毛季

○盛花

○盛花之部

盛花

新後拾遺

毛季

○瞿麦夾水

○瞿麦夾水之部

瞿麦夾水

新後拾遺

盛仲

○瞿麦夾水

○瞿麦夾水之部

瞿麦夾水

新後拾遺

盛仲

○孙生玄冥

○孙生玄冥之部

孙生玄冥

新後拾遺

芳酒乃坐うるうと春の年をねり年のとくとせせせじう

急急

新古今

左夷

我惡ハ極乃下望よりトモル事トモテアシテハシヤ
○急 ○屏ノ參之教シ

呼ノ急美
お榮

笑季

直至今うれしんすくの聲を正せれどもか乃うつ草
○涯 ○夏草流之教シ

夏草邊
お集

足利

○螢 ○歌ニ歌之教シ

部ノ螢
千秋

葉

育宋ハまだくの聲を成すと聞く

○映 ○象映百之教シ

五繁映日

千秋

葉

至作三於下海となりすり夕日下へまほの聲を

○久 ○久急之教シ

葉

久急後今
冬上天皇

そひつゝやうる年以ひおなむてあゆめれぞれアモ

○独 ○独少時雨之教シ

佐々木貴代太田

独少時雨
後古今

千秋

佐木貴代太田

紳少少小松乃種さめ乃初一月一拂はす人もよ

○不 ○不逢夜之教シ

千秋

佐木貴代太田

不逢夜
新千秋

佐木貴代太田

欲別急
日向之教シ

千秋

日向之教シ

夕立正

集

夕立正
日向之教シ

○透 ○空穴透簾之教シ

蒙次遠集

藝集

卷之二

わりくやうふを乃まも。軒車がれども。もなう
あひとみの實字へ必ずしと。文字へ或へ取る。あへ
てもうと又へそと。かまうても。後と。もと。すと。
き文字とへ代取るよく。可也。雅考。

塵字乃事

塵字といふハ文字也。出たまづ。正しく。奇漢文字。

○外

○野外野外。○外外。○天外天外。

之類。○天外天外。

○水

水外之字。これの歌字も。どうも不候文字。

○海海。○水水。

之類。

○川川。

之類。

○江江。○海海。

之類。

○河河。

之類。

○上

○沙沙。○上上。○地地。○上上。○日日。○上上。

之類。

○地地。

之類。

○左左。○右右。

之類。

○左左。

之類。

○天天。

之類。

○天

天天。○深深。

之類。

○雲雲。

之類。

○陽陽。

之類。

○草草。

之類。

○湯湯。

之類。

○雲雲。

之類。

○草草。

之類。

○水水。

之類。

○天天。

之類。

○火火。

之類。

○水水。

之類。

○火火。

之類。

○水水。

之類。

○火火。

之類。

○水水。

之類。

○火火。

之類。

○水水。

之類。

